

ジェネラル・ソーシャルワーク における家族支援の展開

菊 池 信 子

Development of Family Support in General Social Work

Nobuko KIKUCHI

はじめに

ジェネラル・ソーシャルワークは、複雑多様化する生活問題に対応していくために、1970年代以降の方法論の統合化の流れと、北米ではとくにそれを実践できるジェネラリスト養成教育に焦点化して強調されるようになってきた。この経緯は、日本においても1980年代以降に、わが国の状況に合わせ、実践者の方法への導入に焦点化して取り入れられてきている。

ジェネラル・ソーシャルワークとは、システム論的視座と生態学的視座を包括した方法論視座であるエコシステム視座を援用した実践概念である。(太田, 1992. p93.)¹⁾ ジェネラル・ソーシャルワークはスペシフィックに対置する非専門的という意味ではなく、専門家としてジェネラル・ソーシャルワーカーが実践できるべきものである。また、ジェネラル・ソーシャルワークは、包括・統合的視野から人間の社会生活に焦点をあてて、人と環境のシステム状況、時間的経過や変容を理解し、把握し、支援していくことを目標にした実践活動で

ある。

そこで、本論では、わが国のソーシャルワーク実践において家族を対象とした支援が展開しにくかった経緯を踏まえ、上述のような包括・統合的な視野からの実践が可能なジェネラル・ソーシャルワークにどのように家族支援を組み込み、位置づけを明確化していけるのかについて、次の手順で論を展開してみたい。

- 1 家族システムの検討
- 2 家族支援の実践理論化にむけて
—中範囲理論としてエコシステム視座による家族支援—
- 3 ジェネラル・ソーシャルワークにおける家族支援の位置と構成

1 家族システムの検討

家族問題とは複雑多様に表出されるものであり、アメリカではそれに対応するためにシステム論的発想や生態学的視点がソーシャルワークに導入された。日本では1980年代以降、ソーシャルワークにシステム論が導入されてきている。が、そのなかで、家族問題、それに対する家族支援が模索されてきたにもかかわらず、ソーシャルワークにおいて確定的な位置を未だ得られずにいる状況にある。そこで、まず、家族、家族システムについての整理を行う。つぎに家族システムにおけるソーシャルワークとの関係について検討を加える。

(1) 家族について

家族については、社会学的視点からの研究がなされているが、ここではソーシャルワーク実践として家族をどう捉えるかということに焦点化して扱うことにするので、その前提として家族に関する概括的な整理をつけておくに留めたい。

家族は、1つの定義をもちえなくなってきたという状況にある。家族とは誰なのかという問いに対して、血縁、同居人など、人によって家族の捉え方は異

なっているものである。また、家族の規模、世代構成、役割機能や規範等は、時代、地域、個々の家族によっても異なっている。共通していることは、社会を構成する最小単位であり、そこで、成長－養育、心身の維持－介護、消費－労働、休息－余暇、その他の生活活動を行っていくところである。それらの活動は社会的なものであり、社会の仕組みに組み込まれているという意味で家族生活は社会的なものといえる。

ソーシャルワーク実践として家族をどう支援するのかという視点に立つとき、当然ながらソーシャルワークが導入された時期との関連から、わが国では戦後の近代家族をいわゆる家族として捉えようとしている。近代家族とは、モデルとして次のような特徴をもつとされるという。²⁾

- ① 生産からの分離（消費の単位としての家族）
- ② ジェンダーによる固定的な役割分担（夫は仕事、妻は家庭というイデオロギーの普及）
- ③ 夫婦・親子の愛情の強調（情緒性の重視）
- ④ 子ども中心主義（愛育の対象としての子ども）
- ⑤ 家族の集団境界の明確化（核家族化）

このようなモデルは18世紀後半に起こった産業革命によって出現し、イングランド中産階級の家族が原型だといわれている。それ以降、専業主婦から働く女性の増加という時代の変化とジェンダーの視点にもとづく社会的動向等の経緯を受けながら、基本的にはこの近代家族を前提として、1981年にはILOが156号条約において労働政策に「家族」の視点を明確に導入した。ここでは男女の労働者を規定することにより、「家族責任」の遂行は女性だけでなく労働者の権利であると位置づけられ、雇用主はこの点への配慮が必要になるということの表明であり、労働政策の一つに位置づけられたのである。

わが国では、戦後、この近代家族の枠組みに沿ってごく最近まで家族というものが捉えられてきたといえる。家制度の崩壊による新たな法的家族モデルは、憲法にもとづく個人の尊厳と両性の本質的平等という理念によって、夫婦を中心として子を含む核家族が担うことになったからである。しかし、

1980年代までは、親の扶養、子の養育は実態的には家族の私的責任と考えられていた。岡村（1971）のいう「ファミリー ソーシャルワークの分野が発展するかは、家族制度の近代化の程度による。」³⁾ という記述と一致した时期的な意味での実情とみることができよう。

近代家族の成熟という意味で、1990年代以降から、個人にとって家族の概念や家族員の定義が異なってきており、それに伴っての家族関係、家族機能、役割分担等にも変化がみられ始めている。機能の面からみると、2000年度から開始された介護保険は、制度として、家族内の機能とされていた介護を社会化したという意味づけをすることができよう。

家族は、構成員や生活状況、役割・機能において変化し続けているが、変わらないのは、家族は生活の基盤を共有しているという点である。この生活基盤を共有する家族に着目していきたい。

(2) 家族システムについて

上述の家族についての記述から、日本において、家族が社会的な存在としての評価を得、それに対して社会的・政策的な対応・支援が明確にされるものであるという位置づけを得てきたのは、1990年代以降という時期区分については合意が得られるところであろう。

とすれば、日本にシステム論的視座と生態学的視座にもとづくエコシステムの視座が導入された1980年代には、包括・統合的なソーシャルワーク実践の方法が存在していたにもかかわらず、岡村のいう家族の近代化の程度（遅さ）によって、この実践方法に家族支援が明確に位置づけられてこなかった状況がみえてくるのである。

ともあれ、家族は、そこに内在する構成員、機能、関係性等の変容と多様性という変数を含みながらも、社会的な存在として社会的な役割機能を担い、何より生活基盤を共有している。その意味で家族は当然社会システムに組み込まれている。

家族システムについて、アンドレア は4つのサブシステムから構成されるとしている。すなわち、

- 1 もっとも広義の意味の配偶関係
- 2 親と子
- 3 兄弟姉妹
- 4 最小のサブ・システムとしての個人

さらに、家族システムの5つの前提条件をつぎのようにあげている。

- 1 全体は部分の合計よりも大きい
- 2 システムの一部を変化させることは他の部分も変化させることになる
- 3 家族は時間の経過とともに組織され発展する。家族はたえず変化し、生涯にわたり家族メンバーは異なる役割を引き受ける。
- 4 一般的に家族は互いにあるいはそれ以外の人たちからも情報を受けたり、交換したりする開放システムである。家族は開放度と閉鎖度において多様であり、時間の経過に応じて多様である。
- 5 個人の機能不全は、しばしば能動的な感情システムの反映である。ある家族メンバーが示す症状は、しばしばシステムの別の部分からの緊張をそらす方法であり、それゆえ関係性の問題を意味している。⁴⁾

家族システムについて、丸山（1999）は、家族療法が「家族の中の個人」に関心を寄せるのに対して、家族ソーシャルワークの焦点は「環境の中の個人」に関心を寄せ、社会の枠組みの中で家族を捉える、…、“全体の中の開いた下位システム”の一部として理解する…と記述している。⁵⁾ さらに丸山は、ジョンソン（Louise C. Johnson）は、家族を1つの社会システムとして理解する重要性をあげており、…マクマホン（Maria O’Neil McMahan）は家族を他のシステムと同等にクライアントシステムの1つに位置づけ…デウボイスとミレーは…家族システムが第1の“ターゲット”システムとみなされなかったとしても、…相互作用しているシステムの1つである家族システムに影響を与え、結果として家族支援の端緒に結びつく…といった研究者の見解を挙げている。

北島（1994）は、家族ソーシャルワークと家族療法の相違点について、6つの対峙点をあげている。すなわち、

- 相違点1 「家族内ホメオステイシス」対「地域内ホメオステイシス」
- 相違点2 「対人関係システムから個人精神内界システムへの影響」対「個人精神内界システムへの影響から対人関係システムへの影響」
- 相違点3 「家族から個人への影響」対「個人から家族への影響」
- 相違点4 「開いたシステム」対「閉じたシステム」
- 相違点5 「一元的な原因」対「複合的な原因」
- 相違点6 「家族療法の技法」対「ソーシャルワークの技法」⁶⁾

これらを、家族システムという点からみると、家族療法が、家族を家族内という閉じられたシステムのなかで取り扱う傾向があるのに対し、家族ソーシャルワークは、家族を社会構造のなかでの開かれたシステムとして相互作用・交互作用するものであると捉え、外部システムとの関わりをとおして支援していく、と区分して捉えることができよう。これは、前述の丸山のいう「家族の中の個人」に関心を寄せるのに対して、家族ソーシャルワークの焦点は「環境の中の個人」に関心を寄せる、という見解と一致している。

一方、家族は成熟の過程において、その特質として個別化が進み、個別化した個人が抱える問題への対応策として敢えて家族療法を志向する経緯がみられた。具体的には、全国に設置されてきている女性センターの相談部門があり、1995年の北京会議⁷⁾の時期と相前後して相談部門の設置数および相談数は増加してきている。そして、家族療法を含めた心理的対応は、実践の過程で社会との関わりを必要とし、ネットワーク・連携という展開をとおして「環境の中の個人」に関心を寄せて実践するソーシャルワークと協働をする場面が増えてきた。

すなわち、成熟過程にある家族の個人が心理的相談を利用しようとする動機は、家族システムのサブ・システムとしての個人・女性の位置を家族システム内で対等にしていく女性の自立心高揚の意識や運動と関連している。この意味で、相談を利用する人は、女性でかつ経済的に差し迫った困難状況にない場合が多く、直接的には福祉的相談を必要とする層にはない人たちであった。

また児童の健全な養育に対して問題を抱える家族が相談を利用するときには、

当事者の児童に対し養育する家族として、対応方法を知るためという場合が多い。要介護の家族を抱えて相談する家族もまた、同様である。その結果、当事者の家族員は自らが支援を要する当事者としての意識をもたず、家族全員に対する手立てを講じないまま、無理な生活を継続していき、その結果、家族を崩壊させてしまうという経過を辿るのである。

そのようにして初めて、かつて福祉的相談の当事者意識をもたなかった層の人たちが、自己の内面の問題以外に、他の家族員に表出する問題を共有する当事者として、福祉ニーズの対象層に、家族という単位で加ってきたのである。ソーシャルワーク実践においては、このような家族員全員を支援の対象として家族システムとして扱っていく必要が生じてきたといえるのである。

2 家族支援の実践理論化にむけて

—中範囲理論としてエコシステム視座による家族支援—

生態学の発想をソーシャルワークに取り入れたジャーメインによれば、「生態学的視座とは、生物体はその環境に適応しようとして自己を変えたり、環境を変えたり、あるいはその両方を変えることを示している…」と述べている。エコロジカル・アプローチとは、この生態学的視座を理論的基盤とした生活モデルにもとづき、問題を病理的にみるのではなく、人と環境の相互作用の結果であるとし、環境要素の変容によって、利用者とともに具体的な問題解決を行う方法の1つであるという。⁸⁾ 太田(1992)は「生態学的視座とは、人間の生活という生きざまが、人と環境の相互変容関係により生成・循環されるところから、人の適応能力を高め、環境を整備することによって、再び両者の適合関係を改善するよう働きかける発想であり、それによって生活が変容していく過程である」という。⁹⁾

エコロジカル・アプローチを採用した家族支援に関する研究・実践の経緯をみると、ソーシャルワークにシステム論が導入された1970年代のものとして、北島(1994)はターバー(R. H. Tarber (1970))の見解をとりあげている。

ターバー（1970）は家族の問題に対する3つのアプローチ、すなわち、

- 1 個人心理的アプローチ
- 2 社会政治的視点
- 3 エコロジカル・システム・アプローチ

という考え方を示しているという。ターバーは家族ソーシャルワークの考え方としてエコロジカル・アプローチを採用し、個人と家族、個人と学校、個人と職場、個人と社会福祉機関、個人とその他システム、そしてサブ・システム間の相互関係といった全体システムでとらえた。ターバーが取りあげている事例をとおして、ソーシャルワーカーは、人と資源を結びつける linking function を、家族システムと家族外システムの両方に対する translator を、役割として担うという。「閉じた家族システム」内での個々の開いた精神内界システムに対する「家族療法の技法」が、「閉じた地域システム」内で個々の開いた家族システムに対する「ソーシャルワークの技法」が使用されている、というのである。¹⁰⁾

1980年代以降、家族支援に焦点をあてたエコロジカル・アプローチとしては、ハートマンとライドによる家族中心ソーシャルワークがある。アン・ハートマンは「家族が地域・社会のシステムの一部として存在する以上、家族問題の発生メカニズムや家族問題への対処の仕方を、地域・社会との関連で総合的にとらえる考え方や実践の方法が必要である。」としている。¹¹⁾ ハートマンはまた、エコマップの開発者でもある。エコマップは、家族の全体像を把握し、関係性の構図を整理して情報を把握することができ、アセスメントに有効性があると考えられ、活用されてきている。

この時期のエコロジカル・アプローチによるソーシャルワークとしては、他にマルシオのコンピテンス・アプローチ、ジャーメインらによる生活モデルの出現がみられる。これらのシステム思考と生態学的視座との統合を通じ、エコシステムの視座が構成され、具体的なソーシャルワーク実践に活用されてきたという。¹²⁾

以上のことから、家族支援に焦点をあてたソーシャルワークを志向するとき、

このようなエコシステムの視座はつぎの点で有効性があると考えられる。

- ① システムとして家族を捉えるということ
全体としての家族 (family as a whole) への着目をする
- ② 人と環境の相互作用の結果として問題を捉えるということ
とくに個人を問題を抱える当事者として分断し孤立させない
- ③ 環境要素の変容によって、利用者とともに具体的な問題解決を行う方法を適用できること
家族員同士という、共に変容に臨むメンバーがいることと、それを特徴とした支援を展開できる
- ④ オープンシステムとクローズドシステムの相互作用・連環に着目すること
システム論的視座にもとづく家族療法の活用を含めたソーシャルワーク実践をとおして家族支援を具体化できる

つまり、エコシステムの視座にもとづくソーシャルワークとして、家族支援に着目するとき、家族はシステムとしてオープンであったり、クローズドであったりすることに注視する必要がある。ソーシャルワーカーは家族システムの2つのシステム機能に注目し、それぞれの変容に向けてデリケートに関わり、支援していくとき、ソーシャルワーク実践としての家族支援を有効にとり行うことができると考えられる。

すなわち、個別化が進んでしまった成熟過程にある家族が抱える、家族間に発生する新たな関係性の問題というのは、個人が家族を越えて先に社会へ支援的な関わりを求め、家族ダイナミクスを重要視しなくなり始めたところからくる問題であり、それはまさに現代の社会的な問題と捉えることができよう。

3 ジェネラル・ソーシャルワークにおける家族支援の位置と構成

前項で述べたように、エコシステムの視座にもとづくソーシャルワーク実践

における家族支援には、ソーシャルな問題を抱える家族内支援と家族と外部の関係に対する支援との2つの側面が含まれる。すなわち、家族員との関係を含めた、複合化した問題を抱える人を対象にする支援であり、その目的と展開の方法は、問題の表出状況によって異なる。しかし、究極の目標は、生活基盤を共有する当該個人とその家族が困難な状況を克服し、社会的に円満に存在することができることであり、ソーシャルワーク実践とは、その支援過程で適切な変容が家族側の主体的な姿勢によってもたらされるよう関わることである。

そのような家族支援について、ジェネラル・ソーシャルワークへの位置づけを試みてみたい。

(1) 家族支援の位置づけにむけて

家族支援は、これまでのソーシャルワーク研究のなかで、ファミリー ソーシャルワーク、家族福祉、家庭福祉といった表現を用いて、高齢者福祉、障害者福祉等と並立する1つの領域や分野としての位置づけられるものであるとして、その明確化に、岡村重夫(1963)をはじめとして時折検討されてきた経緯がある。しかし、明確な位置づけはいまだ得られていないのが現状であろう。岡村は、家族福祉事業(ファミリーソーシャルワーク)という分野を立て、家族ケースワークの一般的原則と特有の原則の2つをあげ、前者がいわばソーシャルワークの共通項、後者が家族福祉事業(ファミリーソーシャルワーク)の固有性を示す部分にあたるとしている。後者について、岡村は、つぎの2点をあげている。

- 1 家族を全体として (family as a whole) 扱うこと
- 2 個々の家族員のニードと同時に家族員の相互関係 (family inter-relationships) をも考慮すること

さらに岡村は、「家族福祉事業固有の目標は、家族全員がそれぞれの役割を、分担・実行することによって、家族の共同を維持させること…」としている。¹³⁾

また岡村は、問題家族とは、横山源之助の「日本の下層社会」にみる貧困家族、Charles J. Birtの「セントポール市の家族中心計画」にみる「社会的援

助に対する抵抗と権威に対する敵意」, さらにイギリスの研究者による貧困, 不潔, 無秩序, 無計画, 等の指摘を, 特徴づけるものとしてあげている。¹⁴⁾ このような, 1960年代当時に扱われた文献をとおしてみられた問題状況の社会的な特性に対する支援の焦点は, すでに現在と共通しているところがみられることは興味深い。

しかし, 家族福祉がそのように独立した領域・分野に位置づけられたときに, 支援の構図を想定しようとする, 児童であれ高齢者であれ, 生活基盤を共有するメンバーが存在すれば, 家族福祉になるのではないかと仮定される。このことについて, 岡村は, 場合によっては複数の領域に対象 (field) が重複することもあるという。畠中 (2002) によれば, 「母親が世帯主であるひとり親家族の場合, 貨幣的ニーズを充足させることが, 家族福祉を実現する重要課題となります。」という。¹⁵⁾ これもまた, 上述の岡村見解と共通の重複が想定される。

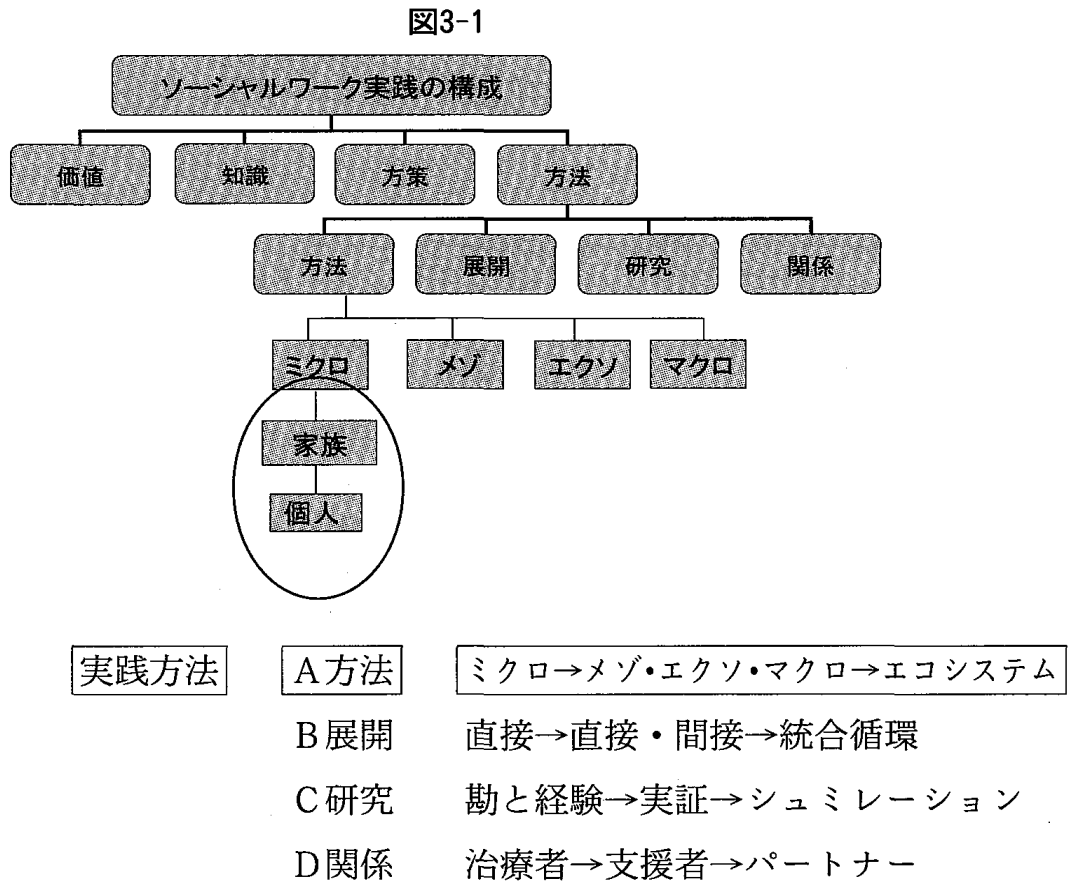
生活基盤を共有している人が問題を抱えていれば, それはすべて家族福祉の対象と位置づけるならば, 対象別分野と矛盾する。むしろ, 家族支援は領域・分野でなく, 家族全体を視野に入れた支援を展開するアプローチのひとつと捉えるべきではないかと考える。すなわち, ソーシャルワーカーは, そのひと (問題を抱える当事者) が所属する家族全体をひとつの家族システムとして捉え, 外部環境との相互作用から生じた問題を家族システムの問題として受けとめる。家族内サブシステムとしては, 家族は, 個々の家族員の相互作用をとおして, 家族システムとして変容をとげ, 問題を抱えた生活を改善していくものであり, それを支援するソーシャルワークのアプローチとして位置づけていくという考えであり, 上述の領域の重複の矛盾は解消されると考えられる。

(2) 家族支援の位置づけ

ここでは, 家族支援について, ソーシャルワーク実践としての構成への位置づけを試みたい。まず, ソーシャルワーク実践の構成を明示し, つぎに方法の視野における位置づけを試みたい。

ジェネラル・ソーシャルワークの実践の構成要素として, 価値, 知識, 方策,

方法の4つがあげられる。この4要素の構造化についての根拠は、社会学理論を基礎とし、バートレットを責任者として全米ソーシャルワーカー協会が価値・知識・インターベンション方策という視点に発展させたものを、方策としての社会福祉、活用する実践方法の2つに分けたことにある。¹⁶⁾ 実践方法は、さらにつぎのように整理される。(図3-1)



実践方法は4つの要素に分類されるが、そのなかで**A方法**についてみると、マイクロ、メゾ、(エクソを含めることもある)、マクロといった視野のレパートリーに分類され、対象との広がりが見られている。すなわち、(表3-1)のように表すことができよう。

表3-1 ソーシャルワーク実践方法のレパートリー

レパートリー		対象 (システム)
ミクロ	case work	個人
メゾ	group work	集団
エクソ	organized work	組織
マクロ	community work	地域

※エクソについては、筆者が英語および対象を加えて作表した。

ここ（表3-1）に、家族支援を位置づけると、つぎのような構成が考えられる。

表3-2 ソーシャルワーク実践方法のレパートリーに家族支援の視点を組み入れた場合

レパートリー	対象 (システム)	レパートリー
ミクロ	casework	個人 social work with individual
		家族 <u>social work with family</u>
メゾ	group work	集団 social work with group
エクソ	organisation work	組織 social work with organisation
マクロ	community work	地域 social work with community

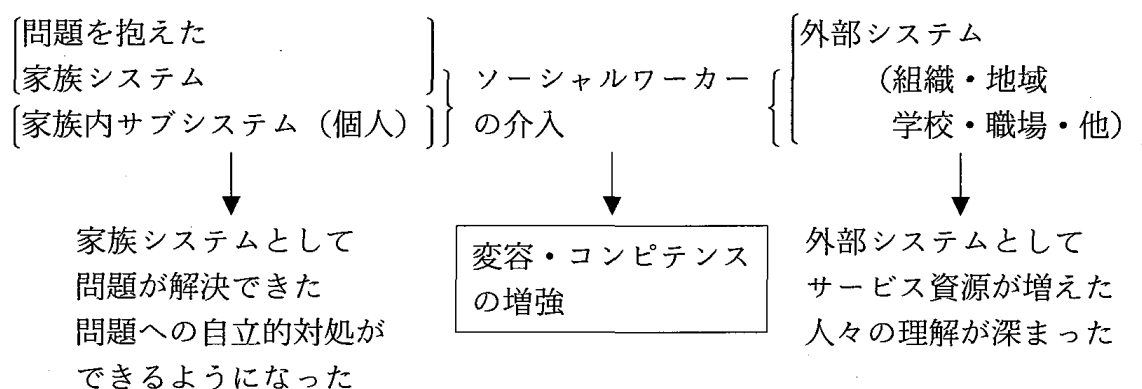
※ 表3-1をもとに筆者が英語および対象を加えて作表した。

家族支援を方法のレパートリーのなかに位置づける際に、ミクロのレベルに、個人を social work with individual というアプローチを適用すると表現するならば、家族はファミリーという単位として、生活基盤を共有する人たちに対するという意味で social work with family と表現されるアプローチを適用するという考えを提起したい。合わせてエクソについては、同様に social work with organisation と表現されるアプローチを適用するということになる。

家族支援をレパートリーのなかに位置づけていくときに考慮すべきことは、対象としての家族は個人というサブシステムによって構成されており、その個人は、直接、家族外システムとの関わりを常にもちながら生活が展開されているという複合性を特徴としている点である。一方、家族間のダイナミクスの変容に注目する場合には、クローズドシステムとして、家族療法の適用が有効である。これらの複合するシステム関係を扱う家族支援は、ジェネラル・ソーシャルワークとしてそれらを包括的に適用していくことによって達成できるものと

考えられる。

つぎに、ソーシャルワーク実践方法の展開についてみると、直接→直接・間接→統合循環という展開過程が示されている。¹⁶⁾ 家族支援の展開について、ソーシャルワーカーとの関係を見ていくと、つぎのような形が考えられる。



上記のソーシャルワーカーの介入によってもたらされる変容は、家族システムのコンピテンスの増強であり、以前よりも自立的に問題に対処できる力量をつけてきている、ということの意味している。

以上、ジェネラル・ソーシャルワークの概念にもとづき、その実践の構成要素を整理したうえで、そこへの家族支援の位置づけを試みた。支援の対象について、家族システムを捉えていくことは、個人を軽視することではない。むしろ、個人の生活の基盤の共有者と展開する生活の実情に迫ることができ、リアリティのある生活理解と生活支援を展開できるアプローチであると主張するものである。

したがって、この主張にもとづき具体的な支援を行うためには、それを可能にする具体的な展開方法として、アプローチを構想することと、それにもとづく実証を行うことが、つぎの研究課題となる。

1) 太田義弘「ソーシャル・ワーク実践とエコシステム」誠信書房、1992.

2) 岩上真珠「ライフコースとジェンダーで読む家族」有斐閣、2003. p59.

- 3) 岡村重夫・黒川昭登編著「家族福祉論」, ミネルヴァ書房, 1971. p2.
- 4) 黒木保博・山辺朗子・倉石哲也編「ソーシャルワーク」中央法規, 2002. pp.7-8.
- 5) 丸山裕子「第3章 家族支援の方法と技術」, 太田義弘編『ソーシャルワーク実践と支援過程の展開』中央法規, 1999. pp.129-130.
- 6) 北島英治「「家族支援」とソーシャルワーク」『ソーシャルワーク研究』 Vol.20 No.2. 川島書店, 1994. pp.42-47.
- 7) 1995年9月に国連第4回世界女性会議が北京で開催された。
- 8) 黒木保博・山辺朗子・倉石哲也編「ソーシャルワーク」中央法規, 2002. pp.10-11.
- 9) 太田義弘「ソーシャル・ワーク実践とエコシステム」誠信書房, 1992. p97.
- 10) 北島英治「「家族支援」とソーシャルワーク」『ソーシャルワーク研究』 Vol.20 No.2. 川島書店, 1994. pp.47-48.
北島は, R. H. Tarber (1970) A system approach to the delivery of mental health, services in black ghettos. American Journal of Orthopsychiatry, 40:4. を取りあげている
- 11) 宮本信義「アメリカの対人援助専門職」ミネルヴァ書房, 2004, p.179.につぎのハートマンの文献を引用している。
Ann Hartman, "To think about the Unthinkable", Social Casework, vol.51, no.3, 1970, pp.467-474.
Ann Hartman, "The Generic Stance and the Family Agency", Social Casework, vol.55, no.1, 1974, pp.199-208.
- 12) 太田義弘「ソーシャル・ワーク実践とエコシステム」誠信書房, 1992. p104.
- 13) 岡村重夫「社会福祉学 (各論)」柴田書店, 1963. p5. p210.
- 14) 岡村重夫「社会福祉学 (各論)」柴田書店, 1963. pp.215-17.
- 15) 畠中宗一編「よくわかる家族福祉」ミネルヴァ書房, 2002. P14.
- 16) 太田義弘「ソーシャル・ワーク実践とエコシステム」誠信書房, 1992. pp.116-121.